

シェイクスピアにおける準動詞

田 中 實

Verbals in Shakespeare

Minoru Tanaka

はじめに

小論ではシェイクスピア（1564–1616）が彼の書いた戯曲中に用いた準動詞（Verbals）について、言語学的文体論の立場から考究する。シェイクスピアの英語は初期近代英語（early modern English）に属するので、現代英語（present-day English）、と大差はない。しかし今からおよそ400年前の英語ということになるので、準動詞の表現にも微妙な差異やシェイクスピア的特徴が見られる。当時のシェイクスピアの英語と欽定訳聖書（*Authorized Version of the Bible*, 1611）は、その後多くの作家や詩人、エッセイスト等の文体に多大の影響を及ぼしてきたのである。

準動詞は不定詞（infinitive）、動名詞（gerund）、分詞（participle）の3種の総称である。準動詞には時制（tense）や態（voice）の語形変化（declension）はあるが、文の主語の人称（person）・数（number）に呼応する語形変化はない。準動詞という名の通り、動詞の働きをすると同時に、名詞的・形容詞的・副詞的な働きをする。

不定詞は動詞の原形を用い、その前にtoをつける場合とつけない場合とがある。不定詞は動詞と同様に冠詞や形容詞によって修飾されないこと、不定詞は目的語・補語・副詞的修飾語をとること、完了形や受動態があることなどの性質がある。また、不定詞は名詞と同様に主語・補語・目的語になる。さらに、形容詞的・副詞的修飾語としての働きをする。動名詞より動詞的性質が強い。ここで具体的な現代英語文の例により不定詞の機能や用法を確認しておくことにしたい。名詞的用法においては、*It's too easy to fall into marriage and too hard to get out.* という不定詞構文の例を見れば、形式主語（formal subject）Itを先ずおき、to fall と to get out を真主語として外位置（extraposition）におき、この不定詞句を後置したことにより、頭位過重（front-heavy）を避けている。とくに現代英語では長い真主語の不定詞句を後へ回す方を好む。この to fall や to get out は論理的主語（logical subject）とも言われる。さらに、*To return to England is to feel like a man who is let down into a cellar after sunset.* では、主語の位置に To return を、補語の位置に to feel をおいてバランスをとっている。

次に不定詞の形容詞的用法の現代英語文の例を見る。Probably I have enough time to *completely analyze it*. では、have の目的語 time を to analyze が形容詞的に修飾している。さらに to と analyze の間に副詞 completely が割り込んでいる。いわゆる分離不定詞 ((split infinitive) の例である。分離不定詞は古くは批判される向きもあったが、今日では不定詞修飾を確かなものとする副詞として、また時に発音上リズムカルになる等の配慮から肯定的に受容されている。今度は不定詞の副詞的用法の例を見る。She grew up to be an obedient girl. では、grew up が自動詞で、その後の to be は結果の不定詞と呼ばれるものである。不定詞のさいごととして、You cannot expect him to be elected Congressman. の例を見ると、これは to be elected が受身で him の目的格補語となっている。

動名詞は不定詞ほど頻繁には用いられない。動名詞は動詞の原形に-ing をつけた形で、動詞的および名詞的機能をおこなっている。動名詞には名詞と同様に、主語・補語・目的語になること、複数形にすること、所有格にすることができる。また、複合語が作られること、冠詞や形容詞を前につけられることなどの性質がある。さらに動詞と同様に、副詞によって修飾されたり、完了形や受動態に作られたりする。次に動名詞を用いた英語構文の例を見る。It is no use crying over spilt milk. では意味の軽い形式主語を先ずおき、真主語の動名詞 crying を後置している。また、I remember well his *being* frequently visited by leading people. では、being ... visited で受動態の動名詞を構成している。この場合 being は受動態を作る助動詞 (auxiliary verb) の働きをしている。さらに、I remember *having seen* Maugham the English novelist. の例では、having seen が他動詞 remember の目的語である。この場合 having は完了形の動名詞を構成する助動詞役である。

準動詞の第3番目は分詞である。まず、限定的用法 (attributive use) の例として、How soon will the wasting assets of the the world be exhausted? では、現在分詞 wasting は-ing 形なので、能動的、動的 (dynamic) に消耗していく意味の分詞形容詞として機能し、名詞 assets を修飾している。さらに、Since prehistoric time man has found spiritual satisfaction in *painted* or *carved* expressions of significant human experiences. では、他動詞の過去分詞 painted と carved が名詞 expressions を修飾し、分詞形容詞として機能している。painted も carved も過去分詞なので、静的 (static) なイメージを醸し出している。次に叙述的用法の分詞の例を見る。We sat *talking* about politics. では分詞形容詞 talking は自動詞 sat の補語である。したがって、パラフレーズすれば、We sat and we were *talking* about politics. ということになる。さらに、Let's get the situation *cleaned up*. では、cleaned up が目的語 situation を意味主語として、目的格補語の位置に機能している。

分詞にはもう1つの重要な分詞構造 (participial construction) と呼ばれる構文上の用法がある。例えば、*Having wandered* off into the plain for a mile, the train slowed against an elephant. では、完了形分詞 Having wandered を文頭においている。主文より前に置いた分詞構造なので、左側派生 (left branch) とか左枝わかれとか呼ばれる。左側派生の分詞構造はあまり長くしない方が、

意味主語（主文の主語）が早く現われるので、平明体（plain style）としての良い英語（good English）となる。さらに次の例、*Frankly speaking* you are too timid. では、*Frankly speaking* がいわゆる懸垂分詞（dangling participle）であり、主文の主語 you が分詞 *speaking* の意味主語とはならないものである。

分詞構造は文中の位置により、さらに右側派生（right branch）と中間派生（mid-branch）がある。シェイクスピアにおいては、『マクベス』に見る限りでは、現代英語の場合と同様に、右側派生（右枝わかれ）が圧倒的に多く用いられている。この場合、主語と述語が先に現われるから、読み手に分かり易い、自然で平易な文になる。分詞構造は現代英語では主に文章語つまり書き言葉によく用いられる。ところが、シェイクスピアでは戯曲の会話中にかなり分詞構造が使われている。

分詞構造は分詞を主な構成要素とする語群であり、主文全体を副詞的に修飾すると考えられる。ただし、形容詞的に主語や目的語・補語などを修飾するのだと説く学者も外国では少なくない。主文の主語＋述語からは統語的に離れ、分詞構造の部分と主文との間には原則的にコンマをおく。今日、分詞構造は口語でも文末に理由を表わす語句として用いることはある。例えば、Sidney Greenbaum は、分詞構造を副詞類（adverbials）とみなし、*Standing on this hill, they fought their last battle.* を例示している。同様に、Louis Arena は、分詞構造を副詞節に相当すると解し、*He died smiling (= while he was smiling) at the people around him.* の例をあげている。また、Curme もやはり副詞節と解し、*Having finished (= After I had finished) my work, I went to bed.* をあげている。もう 1 人、Jerome Shostak は、*Wishing to see us, Jerry raced home.* の例をあげて、分詞 *Wishing* は非制限的用法（non-restrictive use）の副詞類であると説いている。

今度は分詞構造は形容詞類であるとの説をとる学者の例をあげる。J. Warriner and F. Griffith は、左側派生の *Developing rapidly, the storm kept small boats in port* や中間派生の *The storm, developing rapidly, kept small boats in port.* の例をあげて、いずれも *developing rapidly* は、形容詞的に機能していると説明している。Peter Perrin は、*Opening his shirt at the neck he went back to his chopping.* において、分詞 *Opening* は、主文の主語 *he* を形容詞的に修飾していると解している。同じく Norman Lewis は、*Seeing me, he turned pale.* や *Going home, she met a wolf.* の例により、現在分詞の *Seeing* や *Going* は、形容詞的に修飾するとみなしている。

要するに、分詞構造は意味的に未分化のものであるから、曖昧さを宿すことがあり、副詞的および形容詞的の二面的な機能をもつと解される。

I 不定詞表現

1. 不定詞の名詞的用法

(1) *Lady Macbeth. ... to feed were best at home.* ⁽¹⁾

—ACT III, SC.IV, ℓ. 34.

(1)では自動詞 *feed* を不定詞として主語においた仮定法過去の構文である。自動詞主語の不定詞としては、*To err is human, to forgive divine.* (Pope) の例がある。

- (2) *Malcolm.* *To show an unfelt sorrow* is an office
Which the false man does easy.

—ACT II, SC.III, ℓℓ. 133–135.

(2)では主語にだけ不定詞 *To show* を用い、これを他動詞 *does* の主語としている。*show* は *sorrow* を目的語とし、他動詞性を示している。

- (3) *Lady Macbeth.* It is too full o' th' milk of human kindness,
To catch the nearest way.

—ACT I, SC.I, ℓℓ. 17–18.

(3)では *To catch* を真主語として、文頭に形式主語 *It* をおいた例である。主語の不定詞句 *To catch the nearest way* をいきなり冒頭におく発話 (utterance) もありうるが、文頭に意味の軽い形式的な *It* を用いる方が頭位過重にならないバランスの取れた文となる。例えば、*It is wrong to tell a lie.* のごとくである。同じ形式主語対真主語の『マクベス』における不定詞表現では、“*For't would have anger'd any heart alive To hear the men deny't.*” (ACT III, SC. VI, ℓℓ. 15–16.) という仮定法過去完了の例が見られる。この場合、*To hear* は主語であると同時に仮定の意味が込められている。

- (4) *Lady Macbeth.* *To alter favour ever* is to fear.

—ACT I, SC.V, ℓ. 73.

(4)では文頭 (話し出し) の *To alter* を *be* 動詞の主語におき、*be* のあとの *to fear* を補語においている。いずれの不定詞も名詞的用法である。バランスの取れた表現なので、*To see is to believe.* (百聞一見にしかず) のような諺にも見られる。不定詞を作る小詞 (particle) *to* が2回あることで音調の良さ、快音 (euphony) を示している。論理的には、繫辞的動詞 (copulative verb) *be* による *A is B* の等式の構文である。

- (5) *Malcolm.* This murderous shaft that's shot
Hath not yet lighted, and our safest way
Is *to avoid the aim* :

—ACT II, SC.III, ℓℓ. 139–141.

(5)では *be* 動詞のあとに名詞的用法の主格補語 (subjective complement) として *to avoid* をおいて

いる。この主格補語の名詞用法の不定詞は、All や The only thing で始まる構文では、現代英語で口語的に主格補語の不定詞の小詞 (particle)to を省くことがある。

- (6) *Malcolm.* Let not my jealousies be your dishonours,
But mine own safeties :

—ACT IV, SC.III, *ll.* 29–30.

(6)では使役動詞 Let で始まる命令文 (imperative sentence) に目的格補語 (objective complement) として、to なしの不定詞 (bare infinitive)be を用いている。論理的には my jealousies を be により your dishonour と等価とし、かつ、それを Let not によって否定している構文である。さらに、使役動詞 make を用いた、“Ay, my good Lord : your royal preparation Makes us *hear* something.” (ACT V, SC.III, *ll.* 57–58.) のような例も見られる。

- (7) *Gentleman.* I have known her *continue* in this a quater of an hour.

—ACT V, SC.I, *l.* 29.

(7)では目的格補語として原形不定詞 continue を人称代名詞の目的語 her のあとに用いている。次に現代英語の類例をあげれば、(1) I have known the woman *tell* a lie. (2) I have never known the boy *break* his word. (3) I have never known a girl *die* of love, but I have known a broken-hearted lover *lose* weight. (4) We have never known the mother *speak* in public. のごとくである。このように、述語動詞 (predicative verb) know の例では、完了形時制のあとに目的格補語としてよく原形不定詞をおくことがある。

- (8) *Angus.* ... : now does he feel his title
Hang loose about him, like a giant's robe
Upon a dwarfish thief.

—ACT V, SC.II, *ll.* 20–22.

(8)では述語動詞 feel の目的格補語に原形不定詞 Hang を用いている。類例をあげれば、(1) He felt his heart *beat* violently. (2) She felt her pulse *beat* quickly. (3) She felt something *crawl* up her arm. のごとくである。

- (9) *Malcolm.* Devilish Macberh
By many of these trains hath sought to win me
Into his power,

—ACT IV, SC.III, *ll.* 117–120.

(9)では to win は他動詞 sought の目的語となる不定詞の名詞用法である。seek to do は文章語的

(literary) であり、古風な (archaic) 表現で、改まった (formal) な構文である。seek to do より
は try to do の方が今日的には一般的な familiar な表現である。例えば、He sought (= tried) *to con-*
vince her. のごとく用いる。

2. 不定詞の形容詞的用法

- (10) *Lady Macbeth.* ... ; and you shall put
This night's great business into my dispatch;
Which shall to all our nights and days *to come*
Give solely sovereign sway and masterdom.

—ACT I, SC.V, *ll.* 67-70.

(10)では不定詞 *to come* がそれに先行する句 *all our nights and days* を後置修飾している形容詞的用法である。このように直接名詞 (句) を修飾する場合は後置することになる。

- (11) *Malcolm.* For where there is advantage *to be given*,
Both more and less have given him the revolt.

—ACT V, SC.IV, *ll.* 10-11.

(11)では受動態の不定詞 *to be given* がその前にある名詞 *advantage* を後置修飾している。受動態の不定詞は使用頻度は低い。

- (12) *Macbeth,* Thou marshall'st me the way I was going ;
And such an instrument I was *to use*.

—ACT II, SC.I, *ll.* 41-2.

(12)は *be + to-infinitive* の例である。I was のあとに *to use* を予定を表わす叙述形容詞的用法として用いている。

- (13) *Banquo.* You seem *to understand* me,
By each at once her choppy finger laying
Upon her skinny lips:

—ACT I, SC.III, *ll.* 43-4.

(13)では繫辞的動詞 *seem* の主格補語として不定詞 *to understand* がおかれ、主語を修飾する叙述的用法 (predicative use) となっている。この場合、主語 (you) と他動詞 *understand* の目的語 (me) が2人称と1人称の代名詞 (person pronoun) の例であるが、“What a haste looks through his eyes! So should he look That seems *to speak* things strange.” (ACT I, SC.II, *ll.* 46-7) のように、

3 人称を *seems to speak* の主語とし、*speak* の目的語に物をおいた例も見られる。

- (14) *Lady Macbeth. To beguile the time,*
Look like the time ;

—ACT I, SC.V, *ll.* 62-63.

(14)では文頭に文を修飾し、目的を表わす不定詞の副詞用法として *To beguile*（欺くには、騙すには）を用いている。文頭に不定詞をよく使う。

- (15) *Macbeth. To know my deed, 'twere best not know myself.*

—ACT II, SC.II, *l.* 72.

(15)もやはり、文頭の不定詞の例である。*To know* (= *If I know my deed*) は仮定法過去 (*subjunctive past*) の意味であり、現在の事実の反対を仮定している。それは主文の動詞 *were* によって分かる。

- (16) *Macbeth. Better be with the dead,*
Whom we, to gain our peace, have sent to peace,
Than on the torture of the mind to lie
In restless ecstasy.

—ACT III, SC.II, *ll.* 19-22.

(16)では目的を表わす不定詞句 *to gain our peace* を主語と述語の間に中間派生 (*mid-branch*) として挿入している。この中間派生は適度の長さであり、あまり長くしない方が文体的に平明となる。主語 *we* と述語 *have sent* の間隔があきすぎると収斂して文意を掴む妨げになるからである。

- (17) *I Murderer. Now spurs the lated traveller apace,*
To gain the timely inn;

—ACT III, SC.III, *ll.* 6-7.

(17)では主文よりあとに動詞 *spurs* を修飾して、目的を表わす不定詞句 *To gain the timely inn* をおいている。右側派生 (*right branch*) の不定詞である。これは現代英語では位置的に最も好まれ、頻繁に用いられる。主文が先なので文意が掴みやすく、自然な思考の流れに合っているので、Hemingway や D. H. Lawrence は自己の作品中によく用いている。次のように、動詞の直ぐあとに目的を表わす副詞用法の不定詞を用いることもよくある。“*Yet my heart Throbs to know one thing; ...*” (ACT IV, SC.I, *ll.* 100-01.) また、形容詞 (*afraid*) + *to* 不定詞の構文として、“*Alas, poor country! Almost afraid to know itself.*” (ACT IV, SC.III, *l.* 165.) の1例が見られる。

(18) *Macbeth*. ... ; for now I am bent to *know*

By the worst means, the worst.

—ACT III, SC.IV, *ll.* 133–34.

形容詞 bent (= anxious) を後置修飾する副詞用法の to know をおいている。他動詞 know は文末の the worst を目的語としている。この worst は the worst that can befall の意味である。

II 動名詞表現

1. 動名詞の主語の用法

(19) *Macduff*. Our *knocking* has awak'd him; here he comes.

—ACT IV, SC.III, *l.* 41.

(19)では動名詞 knocking を他動詞 awak'd の主語においている。代名詞の所有格 our を限定詞 (determiner) としてつけていることも knocking の名詞的性質を表わしている。この場合, knocking は目的語を持たない自動詞性の動名詞である。

(20) *Macbeth*. There is nor *flying* hence, nor *tarring* here.

—ACT V, SC.V, *l.* 48.

(20)では There-be 構文の主語として動名詞 flying をまずおき, 動詞は単数 (is) のまま, 2つ目の動名詞主語 tarring をおいている。口語表現では最初の主語に be 動詞を一致させ, 複数 are にせずにする。

(21) *Porter*. Here's a *knocking*, indeed! If a man were

Porter of Hell Gate, he should have old *turning* the key.

—ACT II, SC.III, *ll.* 1–2.

(21)では a knocking が here-be 構文の主語である。限定詞・不定冠詞の a をつけている。また, 第2文中の turning も主節の目的語としての動名詞である。

(22) *Macbeth*. ... ; I am in blood

Stepp'd in so far, should I wade no more,

Returing were as tedious as go o'er.

—ACT III, SC.IV, *ll.* 135–37.

(22)では Returning が仮定法過去の be 動詞 were の主語である。

(23) *Lady Macbeth*. ... ; you mar all with this *starting*.

—ACT V, SC.I, *ll.* 42.

(23)では動名詞 *starting* は前置詞 *with* の目的語として用いている。そして代名詞的形容詞 *this* が *starting* を修飾している。*with* 句は原因・理由を表わす副詞句として、動詞 *mar* (= *spoil*) を修飾している。また、“Nothing in his life Became him like the *leaving* it:” (ACT I, SC.IV, *ll.* 7-8.) のごとく、前置詞 *like* の目的語として動名詞 *leaving* をおいている。冠詞 *the* を限定詞として *leaving* の前につけ、*leaving* は *it* を目的語におく点で他動詞性を保持している。

(24) *Malcom.* And my *more-having* would be as a sauce
To make me hunger more;

(24)では複合名詞 (compound noun) *more-having* を *would be* の主語においている。*more-having* は *having more* を意味している。元に *I have more* (S + V + O) という文構造があり、*more* を前に移し、ハイフンでつなぎ、*-ing* 形にしたものである。シェイクスピアは『マクベス』に見られるように、動名詞を不定詞や分詞ほど頻繁に用いてはない。

Ⅲ 分詞表現

1. 限定用法の分詞形容詞

(25) *Captain.* As whence the sun 'gins his reflection,
Shipwrecking storms and direful thunders break,
So from that sping, whence comfort seem'd to come,
Discomfort swells.

—ACT I, SC.II, *ll.* 25-8.

(25)では現在分詞 *Shipwrecking* を名詞の前に限定的に用いている。これは *storms shipwreck* (S + V) という文構造から、*shipwreck* を *-ing* 形にして *storms* の前に移したものである。

(26) *Macbeth.* ... or art thou but
A dagger of the mind, a false creation,
Proceeding from the head-oppressed brain?

—ACT II, SC.I, *ll.* 37-9.

(26)では現在分詞 *Proceeding* が先行する補語の名詞 *dagger* を限定的に後置修飾している。そして、*creation* は *dagger* と同格 (apposition) である。

(27) *Doctor.* Not so sick, my Lord,
As she is troubled with *thick-coming* fancies,

That keep her from her rest.

—ACT V, SC.III, *ℓℓ.* 38-9.

(27)では thick-coming は複合形容詞 (compound adjective) である。元は *fancies come thick* (S + V + C) という文構造から、形容詞 *thick* を *come* の前に移し、*come* を-ing 形にしてハイフンにより *thick* のあとにおいて形成したハイフンつき複合語 (hyphenated compound)、イエス・ペルセンの言う、紐状複合語 (string compound) である。

(28) *Macbeth.* ... : this even-handed Justice

Commends th' ingredience of our *poison'd* chalice

To our own lips.

—ACT I, SC.VII, *ℓℓ.* 10-1.

(28)では他動詞の過去分詞 *poison'd* が名詞 *chalice* を限定的に修飾している。*poison* (V) は *to give someone poison* の意味である。

また、“... and it (= the avarice) hath been The sword of our *slain* kings:” (ACT IV, SC.III, *ℓℓ.* 86-7) のように、*slay* の過去分詞 *slain* が人間名詞 (human noun) *kings* を限定的に修飾している例も見られる。なお、“*strangely visited* people” (ACT IV, SC.III, *ℓℓ.* 150-52) では *visited* は「病氣におそわれた」という特殊の意味に用いている。

(29) *Macbeth.* ... : there, the murderers

Steep'd in colours of their trade, their daggers

Unmannerly *breech'd* with gore.

—ACT II, SC.III, *ℓℓ.* 112-14.

(29)では過去分詞 *breech'd* (= indecently clothed) が先行する名詞 *daggers* を制限的に後置修飾している。分詞形容詞 *breech'd* は副詞類の *Unmannerly* と *with gore* に修飾されているために後置することになる。

2. 叙述用法の分詞形容詞

(30) *Macduff.* By this great clatter, one of greatest note

Seems *bruited*.

—ACT V, SC.VIII, *ℓℓ.* 21-2.

(30)では不完全自動詞 *Seems* のあとに他動詞の過去分詞 *bruited* (= announced; reported 言いふらす, 示す) を主格補語 (subjective complement) として用いている。

(31) *Angus*. Now does he feel

His secret murderers *slicking* on his hands,

—ACT V, SC.II, *l.* 17.

(31)では他動詞 *feel* の目的格補語に現在分詞 *slicking* を用いている。この *slicking* は叙述形容詞的用法とみられる。*slicking* は、*smiling* がすでに完全な形容詞形として認められているのとは異なり、その前段階にあるとみられる。

(32) *Macduff*. I see thee *compass'd* with thy kingdom's pearl,

—ACT V, SC.IX, *l.* 22.

(32)では目的格補語に過去分詞 *compass'd* を用いている。その意味主語は人称代名詞 *thee* である。*compass'd* は叙述用法であり受動的意味をもつ。

3. 分詞構造

(33) *Hecate*. And now about the caudron sing

Like elves and fairies in a ring,

Enchanting all that you put in.

—ACT IV, SC.I, *ll.* 41-2.

(33)では右側派生の分詞構造 *Enchanting* (= *Bewitching*) ～は *While you are enchanting* ～の意味で、付帯状況を表わす副詞節に相当する。分詞構造では付帯状況を表わす表現が最も多い。

(34) *Malcom*. ... I should forge

Quarrels unjust against the good and loyal,

Destroying them for wealth.

—ACT IV, SC.III, *ll.* 82-4.

(34)では右側派生ではあるが主文の他動詞 *forge* (= producing something 仕掛ける) の動作に次いで、*Destroy* するのであり、継続的な用法である。即ち、*Destroying* them for wealth = And I should destroy them for wealth と考えられる。*forge* と *destroy* と他動詞を2つ連続して用い、力強い表現としている。ついでながら、マクベスが前半は *be* 動詞により1つの提言をして、後半では他動詞 *signify* により叙述している例をあげる。“... : it (= life) is a tale Told by an idiot, full of sound and fury, *Signifying* nothing.” (ACT V, SC.V, *ll.* 26-8) *Signifying* = And it signifies という継起的意味である。

(35) *Macbeth*. Will all great Neptune's ocean wash this blood

Clean from my hand? No, this my hand, will rather
The multitudinous seas incarnadine
Making the green one red.

—ACT II, SC.II, ll. 59-62.

(35)では右側派生の分詞構造を文末に継起的に作為動詞 (factive verb) により表現している。incarnadine (= make red) の主語が my hand であるように、Making の意味主語も my hand である。hand は身体の一部であり、換言すれば、無生物主語 (inanimate subject) の例である。手 (hand) に私の意志が働いて血を洗おうとするわけであるが、I のような人間主語 (human subject) の場合より手を客観視し、手がおのずと海を血に染めることが理の当然の帰結であるようなイメージとなる表現である。したがって、波また波の大海原を真紅に染め、碧海を赤に一変させることは必然と思われることになる。

(36) *Macbeth*. And pity, like a naked new-born babe,
Striding the blast, or heaven's cherubins, hors'd
Upon the sightless couriers of the air,
Shall blow the horrid deed in every eye,
That tears shall drown the wind.

—ACT I, SC.VII, ll. 21-5.

(36)では分詞句、Striding (= Bestriding) the blast を主語 (pity) と述語動詞 (Shall blow) との間にコンマで区切って挿入し、主文に対して中間派生 (mid-branch) させている。Striding の意味主語は抽象名詞 pity であり、pity は無生物主語として原因・理由となっている。

(37) *Macbeth*. But in these cases,
We still have judgment here; that we but teach
Bloody instructions, which, *being taught*, return
To plague th' inventor:

—ACT I, SC.VII, ll. 7-9.

(37)では主語の関係代名詞 which (= Bloody instructions) と述語動詞 return との間に受動態の分詞構造 being taught をおいている。この中間派生は、僅か2語の分詞構造であり、短くて思索の余地のないことを暗示している。因果応報として、実行した者、やってみせたものに、はね返ってくるのが必定なのである。

(38) *Angus*. But treasons capital, *confess'd* and *prov'd*,
Have overthrown him.

(38)では2つの過去分詞 *being confess'd and prov'd* が分詞構造として、抽象概念である *treasons* (叛逆)を意味主語にしている。この分詞構造も中間派生である。シェイクスピアは中間派生の分詞構造を右側派生ほどは用いていない。右側派生の方が会話文において、発想法の点で思考の流れに合致しているといえる。

おわりに

以上、シェイクスピアが『マクベス』に用いた準動詞を分析・検討してきたが、不定詞・動名詞・分詞の3種類のうちでは、不定詞の使用頻度が最高であり、次いで分詞を多く用いている。動名詞はごく僅かしか用いていない。

不定詞表現ではこれを文頭におくことが多く、目的を表わす副詞用法をよく用いている。また、形式主語 *it* をまずおき、真主語の不定詞を後ろにまわす外位置 (*extraposition*) の表現をよく使っている。長い不定詞句を後ろにまわして頭位過重 (*front-heavy*) を避けてバランスを取っている。さらに、他動詞 *know, feed* のあとの目的格補語に *to* なしの不定詞 (*bare infinitive*) をおく表現を頻繁に用いている。

動名詞の使用は比較的少ないといえる。これはシェイクスピアに限ったことではない。*a knocking* とか *our knocking, this starting* のごとく限定詞 *a, our, this* などがつくことがあるが、まさにこの *-ing* 形が動名詞の証左であるとしても、*-ing* 形は動詞性を保持しているので、動的名詞イメージを持っている。

さいごに分詞の使用は不定詞に次いで多様である。*Shipwrecking* や *Preceding* のような *-ing* 形は当然、能動的・動的な性質を帯び、*poison'd* や *slain* のような過去分詞の場合は、受動的、静的な意味を帯びる。*Slicking* のように目的格補語に *-ing* 形を用いて、生き生きとリアルに臨場感を醸し出している。

分詞のなかでも重要な分詞構造 (いわゆる分詞構文) であるが、これは日本の学者の間では、副詞類として副詞節に相当する機能を果たしているとみるのが一般的である。ところが、英米などの言語学者 (文法学者) のなかには、分詞構造を形容詞的に機能すると説く人も少なくない。分詞構造は、シェイクスピアの場合、とくに『マクベス』では右側派生と中間派生がよく使われているが、左側派生はみられない。現代英語で多用している付帯状況を表わす *Enchanting* のような例も見られるが、*Destroying them for wealth* (= *And I should destroy them for wealth*) や *Signifying nothing* (= *and it signifies nothing*) のように継起的に用いる例が目につく。中間派生は右側派生ほど多用していないが、*Striding* のようにサスペンス (*suspence*) 効果をあげている。シェイクスピアの英語とて、歴史的・時代的な現象でもある。現代英語において、主に文章英語に特徴的とされる分詞構造まで、シェイクスピアは戯曲という会話文に上記のような分詞構造を用いている。

注

- (1) テキストは、The Arden Shakespeare の *Macbeth* を使用した。

(2003年 9 月22日受理)